

日時：2014年12月26日(金) 18:00~19:40 晴

場所：ちどりビル2F 参加者：51名

定期巡回・随時対応サービスの可能性
～巡回介護ひまわりの1年間を振り返って～

巡回介護ひまわり 森友 絹江さん

介護の現場から医療との連携における課題について提起していただき、今回もとても意義深い研究会となりました。



定期巡回・随時対応サービスについて、オペレーションセンター、1年間の実績(利用数延べ28件等)といった具体的な業務を説明しました。

独居・要介護5・成人T細胞白血病やアルツハイマー型認知症等でターミナル期の80歳女性の事例を報告。困難なケースではありましたが、本人や家族の希望もあり退院。在宅では定期巡回により本人や家族の不安を和らげることができた事例でした。

定期巡回サービスの効果と有効性については、訪問看護との連携により、医療面でのフォローが強化され、ターミナル期など困難なケースでも在宅復帰可能となること、状況の変化を把握しやすいこと、介護保険の限度枠内で収まることなどが挙げられました。今後の課題としては、スタッフの確保、育成といったことが挙げられました。

医療介護の連携強化について

福岡地域福祉サービス協会 吉富 薫さん

4つの事例から医療と介護の連携について具体的に報告。早期発見・対応が在宅生活維持につながるため、訪問回数が多い介護職員からの生の情報は大事な情報であり、医療側は介護職員の発信する情報に対する感度を高める必要があります。

自身が病院や訪問看護ステーションを経験し、現在介護の現場に身を置いていることもあり、医療と介護の間に大きな壁を実感しています。介護職員は看護師へ相談すると「何故ヘルパーなのにそんなこと言うの?」といった空気を感じることがあります。一度そういう経験をすると躊躇が生まれ、大事なこともスムーズに伝えられないことがあります。カンファなどでは医療の専門用語が理解できずに萎縮してしまうこともあります。医療と介護、互いに相手を



尊重し協力する関係をつくり、患者・利用者の立場に立って、今何が必要なのかを考えることが一番重要と考えます。

胃ろうについても、栄養剤の選択など事例を交えて課題提起しました。

< 質疑応答のまとめ >

・医療側としては介護職員からの情報だけで何かを判断することは難しいと感じているかもしれませんが、介護職員は日々利用者を見ながら変化を見て、それに対し責任を感じ相談しています。結果的に何とも言いえないということでも、何らかの返事があると職員としても安心でき、患者の安心にもつながります。

・医療側と介護側とで重要と思える点が違うことがあります。聞いて欲しいことと、教えて欲しい情報との違いがあります。互いの会話が重要と思います。

- ・介護側としても経験を積みながら、医療の知識を学ぶ様に努力したいです。
- ・千鳥橋病院の入院患者さんの事例もありました。病棟では在宅復帰は難しいと思われましたが、家でちゃんと生活できていた様なので、感心し勉強になりました。

グループディスカッション(介護との連携課題)

- ・通所リハや透析などでそれぞれ“ノート”による情報交換が行われていますが、1つにまとめることで情報共有がより良くなった事例がありました。
- ・連携については、誰が、どこへ、どうやって情報を発信するか、難しい課題となっていると感じます。

感想文より

- ・在宅復帰困難に思える方でも、巡回サービスがあれば検討できると思えました。
- ・入院が長引いている患者でもいつか在宅に戻るかもしれないと考え、入院前の生活に繋がらるような看護をしたいと感じました。